

ぬといふに、のりてわたらんとするに、みな人物わびしくて、京に思ふ人なきにしもあらず、さる折しも白き鳥のはしと足のあかき、しぎの大きな水の上にあそびつゝ、魚をくふ、京には見えぬ鳥なれば、みな人みしらで、わたしもりにとひければ、これなん都鳥といふをき、て、名にしおはゞいざごと、はんみやこ鳥わがおもふ人は有やなしやと、とよめりければ、舟こぞりてなきにけり、

〔土佐日記〕それのとし四年承平のしはすのはつかあまりひとひのいぬのときにかどです、略

廿二日にいづみの國までと、たひらかに願たつ、略 廿七日、おほつよりうらとをさしてこぎ

いづ、略 廿八日、うらとよりこぎいで、おほみなとをおふ、略 廿九日、おほみなとにとま

れり、略 四日、承平五年正月風ふけばえいでた、略 九日のつとめて、おほみなとより、なは

のとまりをおはんとて、こぎいでにけり、略 十日、けふはこのなはのとまりにとまりぬ、十

一日、あかつきに船をいだして、むろつをおふ、略 十七日、くもれる雲なくなりて、あかつきつ

く、夜いとおもしろければ、船をいだしてこぎゆく、略 夜やうやくあけゆくにかちとりら、くろ

き雲にはかにいできぬ、風ふきぬべし、みふねかへしてんといひて舟かへる、このあひだに雨ふ

りぬ、いとわびし、略 十九日、ひあしければふねいささず、廿日、きのふのやうなれば船い

さず、略 廿一日、うの時ばかりに船いささず、略 廿二日、よんべのとまりよりことゝまりを

おひてぞゆく、略 廿三日、ひてりて、くもりぬ、このわたり、かいぞくのおそりありといへば、神

ほとけをいのる、廿四日、きのふのおなじところなり、廿五日、かちとりらのきた風あしとい

へば、船いささず、かいぞくおひくといふ事、たへすきこゆ、廿六日、まことにやあらん、かいぞく

おふといへば、夜なかばかりより、船をいだしてこぎくる道にたむけする所あり、かちとりして

ぬさたひまつらするに、ぬさのひんがしへちれば、かちとりのまうしてたてまつる事は、このぬ